

「その3、英蘭戦争、トラファルガル海戦、」

「その1は、白村江の戦い、」

「その2は、「レバントの海戦」と「アルマダの海戦」として別に報告

1. 英蘭戦争と海戦 1652～1672年

1. 概要 黄金時代のオランダに迫るイングランドの挑戦

17世紀はオランダの黄金時代といわれ、世界に冠たる海上交易帝国を築いた。また、同じようにスペインに立ち向かってきたイギリスも、オランダに僅差で追随しつつあった。そのため、世界の海上交易覇権をめぐる争いが17世紀後半から展開されることとなる。そのターニングポイントが20年間、三次にわたる海戦を中心とする英蘭戦争である。そして、それは**オランダの凋落のはじまり**となる。英・蘭海軍の衝突は、

第一次 1652年-54年、「ポートランド沖海戦」

第二次 1655-67年、「北海のローエストフト沖海戦」

「四日海戦 (The Four-Days' Battle)1666年」**17世紀最大の海戦**

第三次 1672-74年。「ソールベーク沖の海戦」など

- ・黄金時代のオランダの海の覇権に迫るイングランドの争い。
- ・中継貿易で繁栄するオランダを押さえるために英は by Britain を可能にする航海条例を公布。イギリス及びその植民地への輸入する荷物を含めて自国荷物自国船主義によるオランダ船の排除を狙うもの。
- ・New York(New Amsterdam)を英が占領。蘭に放棄させる。などの攻防。
- ・数次の海戦。仏との共同によるオランダへの圧力。次第に英への覇権のながれ。

2 .時代背景

2.1 大航海時代の終焉 17世紀中ごろまでに一部の不毛地帯を除いた全ての地域にヨーロッパ人が到達して大航海時代は終焉を迎える。オランダはここにおいて中継貿易による覇権を確立、黄金時代を迎える。世界中の富が英国、オランダをはじめヨーロッパ各国にあつまり近代化の時代が始まろうとしていた。船舶は以前として帆船の時代。産業革命のはじまる約百年前。

2.2 関連の年表 オランダ独立宣言 1581年。 英、スペイン無敵艦隊撃破(1588)。 英、東インド会社設立(1600)。 オランダ、東インド会社設立(1602) 宗教戦争・三十年戦争(第一、二、三期)1616～1648年{新・旧教国の戦い。オランダの独立承認} 英、航海法 Navigation Acts (1651)。 第一次英蘭戦争(1652-54)、 第二次 1655-67年、 第三次 1672-74年。

ペスト、1665年ロンドンに大流行、7万人死亡。 ロンドン大火 1666年 ニュートン、万有引力 1687年、 ショクスピア、1564 - 1616年
「日本」 川中島の戦い(1555) 秀吉天下統一(1590)、 江戸幕府 1603 - 1867年、 鎖国 1639 - 1854年

3. 海戦

3.1 オランダの台頭 東インド会社、香辛料貿易、造船業、海運の近代諸制度

東インド会社の設立はイギリスに遅れたが、東方貿易ではオランダ東インド会社の実力がイギリス東インド会社を上回り、1623年のアンボイナ事件(現・インドネシア・モルッカ諸島アンボイナ島にあるイギリス商館をオランダが襲い、商館員を全員殺害した)これによりイギリスの香辛料貿易は頓挫し、オランダが同島の權益を独占した。イングランドは東南アジアの香辛料貿易から撤退せざるを得なくなった。

図1 オランダ戦艦。Main Top Mast を失った英(?)艦。



オランダは、すでに造船大国で大型商戦を輸出していた

また、ヴェネチア海運から近代海運の諸制度を積極的に導入した。香料貿易を独占したオランダにはアジアの富が流入し、繁栄し、黄金時代を迎えた。イングランドでは反オランダ感情が高まり、英国海峡航行のオランダ船を拿捕した。

3.2 イングランドの不満、 イングランドの製品はオランダ、ハンザ同盟の商人、船舶によって自由に取り扱われていた。これらの国は三国間貿易で繁栄。ロンドン港にはハンザの商館、倉庫、オランダの船があふれた。ここでもイングランドの不満はたかまった。

3.3 航海条例 1651年。イングランドは「自国貨物は自国船積み取り」の条例を制定。これは「クロムウエルの航海条例」とよばれ、ターゲットはオランダ。

3.4 海戦の概要

1) 第一次英蘭戦争(1652年-54年)の「ポートルランド沖の海戦」、1653年2月28~30日
アジアの物産を満載して帰ってきたオランダ商船隊 250 隻を護衛するオランダ艦隊をイギリス海峡で、イングランド艦隊が攻撃。英の勝利。英軍艦は大型艦、装備に勝る。オランダはイギリス海峡の制海権を失う。

場所: イギリス海峡のイングランド南岸「ポートルランド沖」

両軍の兵力: イギリス艦隊(ブレイク提督) (80隻) オランダ艦隊(75隻)

損害: オランダ軍艦 30 隻、商船 70-80 隻、イギリス艦隊被害わずか。

2) 第二次英蘭戦争(1655-67年)の「四日海戦」1666年6月11-14日。

イギリス海峡において、4日間にわたる英・蘭の艦隊の海戦。この「17世紀最

大の海戦』といわれる海戦にオランダの大勝。

両軍の兵力と損害：

オランダ艦隊(デ・ロイテル提督) (80 隻)うち 4 隻沈没にとどまる。

イギリス艦隊(モンク提督) (83 隻)うち 20 隻沈没、6 隻拿捕される。然し、イギリス艦隊は霧にまぎれて整然と姿をけした。

イギリス海峡の制海権は、オランダの手におちた。



図 2 舷側に 4 層にわたり開いた多数の砲門。船尾にも後ろ向きの砲門がみえる。

第三次英蘭戦争 1672-74 年 略 (仏と英が合同してオランダを攻撃。講和成立。)

2. トラファルガルの海戦 1805 年

ナポレオンの野望を粉碎したネルソン艦隊の救国の歴史的勝利

1. 海戦の概要

1) 海戦の位置づけーナポレオンは、20 万の大軍をドーバー海峡に集結、イングランド侵攻の準備を完了して、「せめて 6 時間だけでよい。ドーバー海峡の制海権さえあれば」と制海権獲得に意欲。ナポレオン軍に上陸されれば、その陸軍力の下ではイギリスの存在はない。イギリスにとって、それを阻止する制海権確保のこの海戦は、絶対に勝たねばならない戦い。それを果たしたネルソン艦隊の勝利はイギリスにとってまさに救国の歴史的勝利。艦上で仏戦艦からの狙撃により背骨貫通の重傷を受けて艦内で戦死したネルソン提督は英雄となる。

2) 時 1805 年 10 月 21 日。12.00 頃 ~ 16 時頃。

- 3) 場所 スペイン南西岸・トラファルガル岬 3 の
12 マイル沖海域。ジブラルタル海峡 1
の北西約 38 マイル。
- 4) 両艦隊の遭遇 カディス港 2 へ逃げ込も
うとするスペイン・フランス連合艦隊
をイギリスネルソン艦隊が補足攻撃。
- 5) 海・気象 「北西の微風」、海戦の後から
「しけ模様」。
- 6) 両軍の戦力比較

交戦勢力	
イギリス	フランス・スペイン
指揮官	
ホレーショ・ネルソン	ピエール・ヴィルヌーヴ
戦力	
戦列艦 27、 フリゲート 4、他 2	仏:戦列艦 18、他 8 西:戦列艦 15
損害	
死者 449 戦傷 1,214	死者 4,480 戦傷 2,250 捕虜 7,000 大破・拿捕 22 隻

図 4. 交戦 艦隊と損害など。



図 3-1

図 3-1. 3-2 の図中で、
1 = ジブラルタル、
2 = カディス、
3 = トラファルガル岬。



図 3-2

2. 時代の背景

2.1 産業革命

トラファルガル海戦(1805)は英の興隆が進んだ産業革命(1760年～1850年頃)の進行過程でおこっている。

「産業革命」は、前項の英蘭戦争 1652～1672 年から約百年、ヨーロッパ本土の先進国に先駆けてヨーロッパの片田舎とさへ擲擧されたそのイギリスに興り、工業化が進展した。 コークス製鉄法(1709)、蒸気機関の発明(1710)、紡績機(1764)、蒸気機関の改良・ワット(1769)などの技術の進歩がこれをささえた。一方、**フランスで産業革命**が起こるのはイギリスより約 80 年も遅れて 1830 年とされる。「**船の世界**」では蒸気船の発明は 1807 年(米国)なので、トラファルガルの海戦 1805 年の時点ではまだ帆船の時代であった。

「**大砲の性能**」では、トラファルガルの海戦の**イギリス艦隊の旗艦 Victory**の大砲の射程は約 3,000 ヤード(2,740m)程度の時代。



図5 ネルソン提督

2.2 ナポレオンの登場と膨張戦略

ナポレオン・ボナパルトは、イギリスの産業革命の始まった頃 1769 年に生まれ、フランス革命後のフランスをまとめあげ、帝政を敷き、全ヨーロッパを侵略していった。

イタリア遠征 1796-97 年、	エジプト遠征 1798-99 年、
第 2 次イタリア遠征 1800 - 01 年、	ドイツ・オーストリア遠征 1805 - 06 年、
イベリヤ半島遠征 1807 - 08 年、	ロシア遠征 1812 年そして戦いに挫折してセントヘレナ流配。 と波乱の経過をたどる。

2.4 トラファルガルの海戦前夜

1) **イギリスの海の支配とネルソン** 18 世紀、次第にイギリスは数々の海戦に勝利して海の支配を強めてゆく。**1797 年スペイン、ポルトガル(セントビンセント岬沖海戦)**との 2 度の海戦に勝利し制海権をにぎる。但し、地中海ではフランスが支配力を維持し、ナポレオンのエジプト遠征となる。これをイギリス艦隊が攻撃、ネルソンはフランス艦隊を撃滅(**ナイルの海戦 1798 年**)、世界の海の支配力を高める。更に **1802 年コペンハーゲンの海戦**でデンマーク海軍を撃破。ここでもネルソンの**積極的接近攻撃**がひかり、単艦対単艦、あるいは艦隊決戦のように純然たる海上戦には天才的な機略、戦術眼を發揮して大勝利を収めてきた。ここにおいて「**ネルソン提督**」の勇名は海の世界で特に高まり、既に「トラファルガル以前」において、名前だけで敵が戦意を殺される海の猛将となっていた。彼自身、1794 年 36 歳のコルシカ島要塞攻撃の際敵弾の跳ね飛ばした岩石が**右目を強打して失明**、1797 年カナリヤ諸島の上陸攻撃のとき敵弾を右ひじに受けて**右腕を失っている**(このように、陸上での作戦に限れば成否は半ばしている)。

2) ナポレオンのイギリス侵略戦略、

ナポレオンの侵略にたいして、イギリスは既に 1790 年代から本土の防衛準備にかかっている。その中には全長 28 マイルの防御運河(陸軍運河)、湿原などもある。1803 年 4 月には英仏戦争となる。1804 年 10 月にはスペインがナポレオンの同盟に加わる。イギリス

は防衛措置として、フランスの港に加えてスペインの港を海上封鎖する。イギリス海峡のルアーブル、プレスト港、更にスペインのカディス港など。

ナポレオンはドーバーの対岸に 20 万の大軍を集結、海よりそのテントの大集団が眺められ英仏の緊張が高まる。

3) 何故、スペインの「トラファルガル」なのか。 「カディス港」の封鎖作戦。

この海戦における「ネルソン艦隊」の「フランス・スペイン連合艦隊」攻撃が、イギリス海峡でなく「トラファルガル岬沖」なのか。またなぜ艦隊対決となったのか、疑問に思っていたが、それは上記の経緯で、ネルソン中将の「イギリス艦隊」が「カディス港」に仏・ヴルヌーヴ中将司令官指揮の「仏・ス連合艦隊を封鎖」していた作戦にあった。ナポレオンの命令「カディスに退避している仏・ス艦隊は、即刻ナポリにめざして出航せよ」。ヴルヌーヴは、封鎖されている中の出航は危険として、出港を控えるが、2日後態度を一変して、ついに出港(1805年10月19日朝)。イギリス偵察艦がこれを発見。即刻カディスから50マイルの距離にあった「ネルソンのビクトリー」に伝えた。「ネルソンは、敵がジブラルタル海峡から地中海に逃げ込むと推定し、「南東に全艦追跡」の信号旗をあげる。風は西北西の微風、うねりが高くなりつつあった。追いつくのに約2日を要した。

2.5 戦闘まで

- 1) 「**仏・ス連合艦隊**」反転　ネルソンに追跡されていることを知り、地中海への退避不能と見たか、「反転しカディス港」に逃げ込もうとする。10月21日正午ごろネルソン艦隊は「**仏・ス連合艦隊**」(以下敵方)を補足する状態となる。
ネルソンは風上側、連合艦隊は風上に切りあがる形の航行で接近。
- 2) **ネルソンの作戦**、(事前の命令と「敵方」との対比)
「**T字戦法**」　艦隊27隻を2手に分け、敵艦隊の略中央にほぼ直角に切り込み、敵を2分する。これが所謂「T字戦法」で、世に「**ネルソン・タッチ**」とよばれる。(「敵方」は31隻を7+7+7+10隻の単縦陣形を保とうとする)。
「**各自の状況判断**」を尊重　「航行順が戦闘順だ」　敵方は司令官の命令優先。
ネルソン最後の信号　「**England expect that every man will do his duty.**」

2.6 戦闘経過　微風 船速は1マイル以下。「ひどくのろのろとした」スピードで接近。

- 1) **射程距離に入る**　—1805年10月21日。夜が明けて、更に追跡6時間の後、正午ごろ射程距離に入る。「**12:15頃敵方から初弾発射**」。以後の艦隊関係位置は下の図6のとおり。接近して彼我入り乱れての激しい戦闘となる。
- 2) 「**ネルソンの旗艦ビクトリー**」が敵艦隊に突入して敵艦隊を分断。接舷せずに大砲発射。最初は敵方戦艦「ネプチューン」を交わしたが、次の敵方戦艦「ルドゥタービル」に衝突、2隻の戦艦はがっしりと絡み合った。
- 3) **13時15分。ネルソン重傷**。「ルドゥタービル」のマストに予め配置されていた狙撃手によって背骨を貫通される重傷。狙撃手はマスカット銃とともに手投げ弾も使用。
- 4) **各艦、大砲発射の接近戦**。マスト、帆桁倒れ砲弾による木材破片は飛びちる。激戦。
- 5) **16時ごろ、「仏・ス連合艦隊」は降伏**。
- 6) 16時30分。「イギリスの完璧な勝利」の報告をうけ、ネルソンは、「神様のおかげで、義務を果たすことができた」とつぶやきながら、「**ビクトリー**」艦内で死亡した。
- 7) 軍艦損失　「**仏・ス連合艦隊**」沈没 7、拿捕 17隻 計 24隻、
「**イギリス艦隊**」なし、　なし、　計 なし」
人的損害　「**仏・ス連合艦隊**」死者 8,000人 捕虜 7,000人

「イギリス艦隊」 死者 1,600 人

2.7 イギリスの制海権確立 ナポレオン のイギリス上陸侵攻作戦は粉碎された。

2.8 海戦の過程における両艦隊の位置関係図

12時.00分 海戦の始まり

12.時 45分 「ビクトリー」が敵艦隊縦列に突っ込む

13.時 15分 接近戦。ネルソン の負傷時点

14.時 00分 接近戦、大激戦。

4つの状態を次ページに並べて示す。

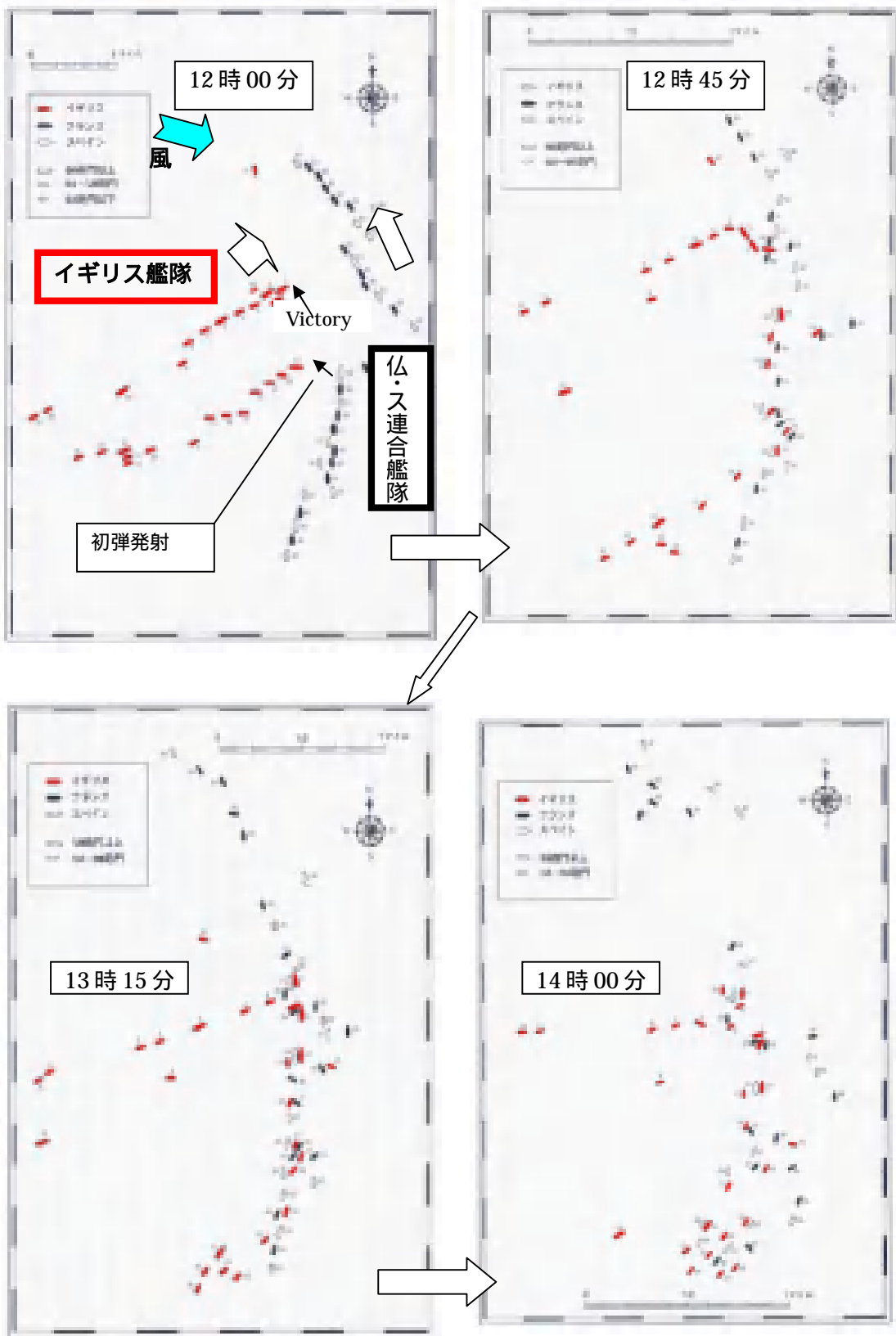


図 6. 両艦隊の戦闘中、両艦隊の各艦の位置。6-1,6-2、6-3、6-4。
 図 6 は、「トラファルガル物語」の図を加工して作成。、図 7 も同書より。



図 7-1



図 7-2



図 7-3

図 7. 大破した戦艦

- 7-1 裸同然になった英戦艦・「ベライル」
- 7-2 火災炎上中の「アシル」
- 7-3 捕獲された「サンルイデフォンソ
(中央)」、これもマストはなく裸同然

3. イギリス国家に救った大海戦の勝利

挿話 今から3年前になるが、「今年2005年は、この大海戦の丁度200年目にあたる。イギリスでは、多くの記念行事がおこなわれた。その一つ。2005年6月29日イギリス南部の軍港ポーツマス沖の海上でエリザベス女王が参加して行われた海軍の観艦式。そして引き続き本物の帆船によるトラファルガル海戦の再現がおこなわれた。さすがにEUでヨーロッパの融和を目指している時代なので、イギリス対フランスという形ではなく、青組みと紅組みの決戦という形式だった。5カ国から参加した都合17隻の記念的帆船が実際に大砲を放ちながら、トラファルガル海戦の実際のありさまを再現したばかりか、ネルソンに扮した俳優が戦艦ヴィクトリーに乗りこむ場面からはじまり、死の場面までを演じた。このイベントを報じるBBCのニュースでも、トラファルガル海戦での圧倒的勝利がなければ、イギリスの19世紀における繁栄、世界にまたがる大英帝国の建設がありえなかっただろうと述べられているが、トラファルガル海戦での勝利はイギリスにとって、というより、世界史の中でそれほど重要な出来事であった。しかも、当時の海軍の戦いにおける勝敗が、その後とは比較にならないほど司令官個人の能力と結びついていたということから、自分の命をかえりみることなく勝利を目指し、それを見事に達成したネルソンに関心が集まりいまさらのように賛美されるのも当然といえる。」(「トラファルガル海戦物語」、訳者山本史郎氏のあとがきより)

4. 結び

1. 激動の時代

英蘭戦争(1652～1672)から**トラファルガル海戦(1805)**の約150年の間はヨーロッパはまさに激動の時代である。この間には、ヨーロッパでは、ロシアからスペインを含めて戦争が繰り返された。イギリスではスコットランドとイングランドの統合による**ブリテン連合王国**が形成され、やがて**産業革命**となる。新大陸では**アメリカの独立宣言**、フランスでは**フランス革命**、そして**ナポレオン**の台頭と没落などである。海の貿易戦略としての「Navigation Acts 航海法」は重要なエポックである。

海、船の視点でみると、この時代はまさに**英国の興隆の時代**と総括することができると思う。

2. 「ネルソン」、イギリスの世界へ――

海戦の世界ではやはり、「**ネルソン**」に強い関心をひかれる。その理由はやはり、その作戦能力、現場での積極果敢な取り組み姿勢といえようか。「ネルソン」はわが帝国海軍においても、軍神と同列にあがめられその扱いは戦後も続いているとみている。船の世界では、この間に造船の発展の基礎が固められ、産業革命の過程に製鉄や機械工業化が進んで、1800年ごろから急速に建造量、船腹量が増加して、世界を制覇してゆく。これらについては、稿を改めたい。

1. 疑問

- 1) **仏・スペイン連合艦隊の反転** カディス港を脱出したヴルヌーヴ中将司令官指揮の「仏・ス連合艦隊」が「ネルソン艦隊」の追撃を受け始めた後、地中海への脱出困難とみて、反転し再びカディス港に逃げ込もうとした。ネルソンはこれを補足するのに2時間を要するのだが、ヴルヌーヴは何故反転したのだろうか。よほどネルソン艦隊から逃れきれない poor な船速だったのか、恐怖心があったのか。
- 2) **大型帆船・戦艦の旋回性能** ネルソンの旗艦 Victory は T 字戦法により、敵方艦隊の中央部に突っ込むとき 12 時 45 分前後の航跡を推定すると下手回し、次に上手回しをしたように S 字状のかなり急な旋回航跡の後に敵艦に衝突している様に見える。追い風・微風もとで、このような大型帆船戦艦がこんなにシャープな運動ができるのか。やや疑問。L の何倍の旋回径で旋回できるのか。疑問がのこった。
以上。